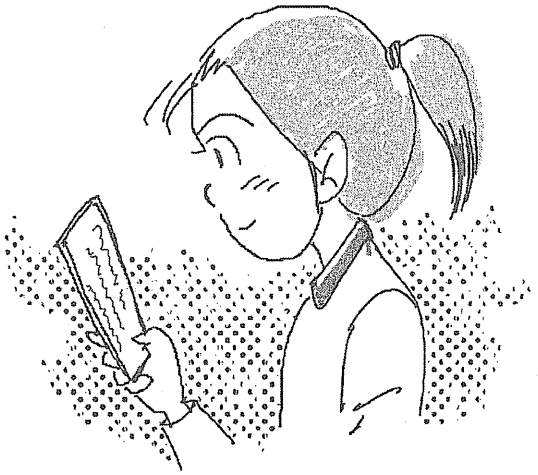
異文化と心通わせ ⑫

村田　佳子



3月になり卒業式の季節になりました。あわただしく3学期を過ごしたかと思うと卒業式が来て、入学式や入社式と決められたスケジュールに沿っていたらあっという間にゴールデンウイークになっていた、そんな春を過ごしたことがある方も少なくないでしょう。

先日、パソコンに向かっていた夫がある映像を見るよう勧めてくれました。それは、MacやiPodなどで有名なコンピューター会社Apple社を創設したスティーブ・ジョブズ氏が米国、スタンフォード大学の卒業式で学生に向けて行ったスピーチでした。生まれてすぐ養子となったジョブズ氏の生い立ち、事情があって決めた大学中退、20歳の時ガレージで始めた会社Apple社とそこでの解雇や復帰、そしてすい臓がんの手術の経験を踏まえて「死」についても触れ、学生たちへの「想い」も分かりやすい表現で述べていました。

卒業のことば

彼が17歳のころに読んだ「1日1日を人生最後の日だと思って生きよう」という文章から、その後33年間毎朝、「今日が人生最後の日だったら今日やることはやりたいことか」と問い続けてきたと話し、学生たちには「限られた時間を自分の心の声や直感に従って生きるよう、好きなことがまだ見つかっていないならあきらめないで見つけること、そうすればそれを愛して続けられるはず」と伝え、「Stay, hungry, Stay, foolish（ハングリーであれ、バカであれ）」と結びました。

内容もさることながら彼の話す声や自然な間の取り方が魅力的でした。お近くにパソコンがある方は「ジョブズの卒業式スピーチを字幕で」と検索すると動画に字幕がついているページ（mbp&co.）につながりますのでお勧めします。

こうした言葉も学生のころに聞いていたらあまり心に響かなかったかもしれません。そしてあと20年、30年たったら感じ方はさらに違ったものになっているでしょう。私にも中学卒業時、担任の先生からいただいた言葉、短歌があります。クラス全員にそれぞれの名前の入ったものを詠んで短冊に書いて贈ってくれたのです。私の歌は「気立てよし　意気よし　身よし　礼もよし　この行く道ぞ　幸せ来たる」でした。「よし」とこの道の「こ」で「よしこ」と名前が入っています。

15歳だった私は意味など考えもしませんでしたが、母はその短冊を私の部屋に大切に飾っておいてくれました。高校へ行っても、卒業して時々帰省しても、ずっとそれは目に付かなかったのですが30歳を過ぎたある日、こんなことがありました。

ある金曜の午後、東京・新宿駅近くで仕事を終え、当時住んでいたつくば市に戻るため電車に乗ろうとしたら急に鶴岡に帰りたくなったのです。少々いやなこともあってたぶん、軽いホームシックになっていたのでしょう。私は携帯電話で庄内便の飛行機を調べましたが空席はありませんでした「じゃあ、せめて空港にでも行って気分転換しよう！」。そう思って羽田空港に向かいました。あきらめの悪い私は、もう1度空港の窓口に空席がないか聞きました。すると「たった今1席、空席がでました」というのです。私は迷わず帰ることにしました。

家族は数カ月ぶりで急に帰ってきた私に驚いたはずですが、何も聞きませんでした。そのとき、自分の部屋にあるこの短冊が目に留まったのです。気立ても身も礼もいいとは思えませんが、毎日会っていた先生が1人でもそう思っていてくれて、そのまま前に進んで幸せになってほしいと願って書いてくれたことを感じうれしかったのです。

そのおかげで、このときの帰省で充電でき、週明けには元気に出勤していました。思えば、高校入試と卒業が重なるこの時期、40人以上の名前を入れた短歌を考えるのは大変だったはずです。中学卒業にいただいた言葉でしたが、理解するまで15年もかかってしまいました。私も先生のように言葉そのものの意味はそのときすぐに届かなくても、その都度「想い」は自分らしい方法で伝えようと今、感じています。

（鶴岡市出身、コーチングシステムズ）